３　農具　～季節ごとの農作業(稲作)～

春　米作りのはじまりから種ふりまで

米づくりの基本は田の整備からはじまる。春では、主に田うないから種ふりまでの工程と利用する農具。

● 田起こし（田うない）● ３月中旬から４月中旬

田起こしとは、稲を植える前の乾いた田の土を掘り起こし、細かく砕く作業。田うないとも呼ばれる。人力によるものと畜力のものがある。人力には、万能と呼ばれる農具が利用される。これは、畜力による田起こしが難しい湿田の深田などで利用された。　（使用する農具：万能・平鍬）

■万能

2 ～ 6 本の刃を持つ股鍬。弥生時代、すでに木製の股鍬があり、古墳時代には鉄製のものもある。関東地方では、1804 年～1830 年に普及し、万能と呼ばれていた。主に粘土質土壌の耕起用として各地に普及した。

● 田のくろつけ ●

田んぼと田んぼの間に土を盛り上げ、境にしたものがクロ（畔）である。クロは水の確保（保水）や田作業の小道としても利用されてきた。クロつけの方法は地域によって異なるが、田んぼに水を入れて田うないが終わってから行う地域が多い。埼玉県の低地では、鍬で前年のクロの土を取ってから新しい土を付けて修復する。こうしておくと代掻きが行いやすくなる

←■鍬

田畑の耕起、畔塗り、畝立てなど収穫まで利用される。土地の地形や土壌に合わせた種々の鍬が作られている。

■ふみ鍬・てすき →

今日のスコップの用途で足で土の中に踏み込み、耕起する農具。